

マリアの親戚エリサベトの物語

ルカによる福音書 1 : 39 - 45

2018/11/07 井田 泉

主イエスの降誕よりおよそ半年前、ヨハネと名付けられる男の子が誕生しました。彼は成人した後、やがて人々に救い主の到来が近いことを告げ、救いを求める人々にヨルダン川で洗礼を授けるようになりました。そしてイエスさまもみずから願って、このヨハネから洗礼を受けられます。このヨハネは、イエスの十二弟子のひとりの同名のヨハネと区別して、「洗礼者ヨハネ」「バプテスマのヨハネ」と呼ばれます。今回の主人公はそのヨハネの母、エリサベトです。



ヨルダン川

エリサベトは「アロン家の娘の一人」（ルカ 1:5）と記されています。アロンとは遠い昔のモーセの兄弟で、モーセまた姉のミリアムとともにイスラエルの人々をエジプトから脱出させ、長い荒野の旅を導いた人です。ことに彼は、口の重いモーセに代わってしばしば神の言葉を人々に伝え、イスラエルの祭司の先祖となりました。つまりエリサベトも祭司の血筋をひく人でした。なお「エリサベト」とは「わたしの神は喜び」という意味です。

わたしの夫ザカリアはアビヤ組に属する祭司でした。住まいはエルサレムではなく、エルサレムにほど近い山里にありました。夫は祭司の務めを果たすときにエルサレムに出かけて行きました。エルサレム神殿には大祭司がいて、すべての祭司を束ねるとともに、大きな宗教的権威を持って人々の信仰と生活を指導していました。とはいえ正直に言えば、当時の大祭司はほんとうに神さまのほうを向いて生きているとは思えませんでした。地位と権威を用いて大きな利益を得ていたように感じています。祭司の数は多く、わたしたち夫婦の生活は豊かではありませんでしたが、神さまの前にまっすぐに生きるようにと努めていました。

わたしたちは子どもが授かるようにと願い祈っていたのですが、それはかなえられず、すでにわたしたちは年が進んでもう諦めていました。

あるとき、夫ザカリアは自分の組が当番となり、神の前で祭司の務めをしていました。そのときくじを引いたところ、エルサレム神殿の奥の聖所で香を焚く役となったのです。香を焚くと匂いと煙が立ち上っていくので、それは祈りの象徴の意味があります。人々の祈りを香に託すのです。大勢の人々はその間、外で待っています。自分たちの願いや苦しみを神さまに聞いていただくことを切望し、祭司がそれを神さまに取り次いでくれることを信じて待っているのです。

わたしも外で待っていたのですが、夫はなかなか外に出て来ませんでした。長い時間がたってようやく出て来たとき、夫は口が利けなくなっていました。本来祭司はそこで、待っていた人々を聖書の言葉で祝福するはずなのですが、声が出ないので身振り手振りでそれを表そうとしていました。よほど重大なことが聖所で起こったに違いありません。

エルサレムでの祭司の務めの期間が終わって、わたしたちは家に帰りました。分かったのは、夫が聖所で天使と出会ったこと、天使はわたしたちに子どもが与えられると告げた、ということでした。しかしそれに対して夫は信じようとしなかったので、天使から口を封じられたようです。

やがてわたしは自分の胎内にいのちが宿っていることを知りました。子がいないことで世間からは長い間軽蔑の目で見られていましたから、わたしは思わずこう言いました。

「主は今こそ、こうして、わたしに目を留め、人々の間からわたしの恥を取り去ってくださいました。」ルカ 1:25

夫ザカリアは話すことができなかつたので、言葉で詳細に語り合うことはできませんでした。けれどもわたしたちは、子どもを授かったことは単にわたしたちだけのためではなく、神さまからの使命が与えられたことをはっきりと理解していました。

夫が聖所での務めを果たしたあの時からおよそ半年くらいたったとき、突然思いがけない訪問を受けました。親戚のマリアです。マリアはガリラヤのナザレから何日もかけて急いでやってきた様子です。マリアの挨拶の声を聞いたとき、わたしの胎内の子がおどりました。その時、不思議な喜びが湧き起こりました。一瞬でわたしもマリアも理解したのです。わたしたちは神さまの使命と祝福を共に受けていると。わたしの口から喜びと感動の言葉が溢れ出しました。

「あなたは女の中で祝福された方です。胎内のお子さまも祝福されています。わたしの主のお母さまがわたしのところに来てくださるとは、どういうわけでしょう。あなたの挨拶のお声をわたしが耳にしたとき、胎内の子は喜んでおどりました。主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いですでしょう。」ルカ 1:43-45

これはうまく言葉では説明できないことです。けれどもわたしはマリアが神の子を宿していることをはっきりと理解したのです。マリアの胎の子もわたしの胎の子も、そしてマリア

もわたしも、神さまの愛によって包まれ、限りない幸せを感じました。同時に、神さまのための働きをさせていただき決意を共にしたのです。

そのときマリアの口から賛美の歌が溢れ出しました。

「わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます。

身分の低い、この主のはしためにも、目を留めてくださったからです。

今から後、いつの世の人も、わたしを幸いな者と言うでしょう、

力ある方が、わたしに偉大なことをなさいましたから。

その御名は尊く、その憐れみは代々に限りなく、

主を畏れる者に及びます。……」 1:47-55

マリアはわたしたちの家に3ヵ月ほど滞在してからナザレに帰って行きました。マリアは自分が天使のお告げを聞いて身ごもったことを、だれにも言うことができず、わたしにだけ伝えるに来てくれたのでした。

やがて月が満ちて、わたしは男の子を産みました。近所の人々や親類は、神さまがわたしを慈しまれたことをとても喜んでくれました。8日目は男の子に割礼を施して神の民に加え、正式に名前を付ける日と決まっていました。人々は夫の名前を取って「ザカリア」（意味は「主は覚えておられる」）と名付けようとしていました。しかしわたしは「この子の名前はヨハネとしなければなりません」と強く言いました。なぜならわたしは夫から、天使から子どもの名前をヨハネと名付けるように命じられたことを聞いていたからです。人々は「あなたの親類にはそういう名前の人はいない」と納得してくれませ



マリア、イエス、ザカリア、ヨハネ、エリサベト

いなく、それで夫ザカリアに「この子に何と名を付けたいか」と手振りで尋ねました。ザカリアは身振りで字を書く板を出させて、「この子の名はヨハネ」と書いたもので、人々は皆驚きました。ヨハネとは「主は恵み深い」という意味です。

するとたちまちザカリアの口が開き、舌がほどけて、神

を賛美し始めました。近所の人々は神さまが働いておられることを感じて恐れしました。こうしてこのことすべてがユダの山里中で話題になりました。これを聞いた人々は「いったい、この子はどんな人になるのだろうか」(1:66)と言いました。そのような言葉を聞くのは、誇らしいことではありましたが、それ以上に強い恐れと使命を感じ、心から神さまに祈る毎日でした。

主の手がこの子と共にあることを、だれよりもわたしが感じていました。

夫がおよそ 10 ヶ月ぶりに言葉と声を取り戻したときに発した言葉をお伝えしなければなりません。ここには主が夫ザカリアに示されたことと、夫の思いがすべてこめられている気がします。それだけではありません。ザカリアは聖霊に満たされて歌ったのです。

「ほめたたえよ、イスラエルの神である主を。

主はその民を訪れて解放し、我らのために救いの角を、僕ダビデの家から起こされた。

昔から聖なる預言者たちの口を通して、語られたとおりに。

それは、我らの敵、すべて我らを憎む者の手からの救い。

主は我らの先祖を憐れみ、その聖なる契約を覚えていてくださる。

これは我らの父アブラハムに立てられた誓い。こうして我らは、

敵の手から救われ、恐れなく主に仕える、

生涯、主の御前に清く正しく。

幼子よ、お前はいと高き方の預言者と呼ばれる。

主に先立って行き、その道を整え、

主の民に罪の赦しによる救いを、知らせるからである。

これは我らの神の憐れみの心による。

この憐れみによって、高い所からあけぼのの光が我らを訪れ、

暗闇と死の陰に座している者たちを照らし、我らの歩みを平和の道に導く。」ルカ 1:68-79

わが子ヨハネは、身も心も健やかに成長していきました。しかし夫の祭司の職を継ごうとはしませんでした。ヨハネは荒野で祈りのうちに過ごすようになり、やがて立ち上がって神の国の切迫を伝えるようになります。ヨハネは民衆の味方でした。同時に齒に衣を着せずに大金持ちや権力ある者たちの罪を責めました。それが彼の命を縮める結果となったのです。そのことについてはこれ以上は申し上げないことにします。

ただヨハネが、生涯をかけてイエス・キリストを指し示したことだけは伝えたい。そしてわたしたちももちろんそうですが、多くの人がイエスさまと出会って本当の幸いを得てほしいと心から願っています。